

「日本の医薬・博物著述年表」の作成で分かったこと

真柳 誠

年表は時系列による史学の基礎資料集ゆえ、これまで斯界でも多数編刊されてきた。代表には以下の各書がある。

大槻如電『洋学史年表』(二八七七、新撰版一九二六)。白井光太郎『日本博物学年表』(一八九一、改訂増補版一九三四)。富士川游『日本医学史／日本医事年表』(一九〇四)。中野操『皇国医事大年表』(一九四二、増補版一九七二)。藤井尚久『医学文化年表』(一九四二)。赤松金芳『薬物史年表』(一九六一)。矢数道明『明治百・百十・一二三年漢方略史年表』(一九六八・七四・九二)。上野益三『日本博物学史／新撰詳注日本博物学年表』(一九七三)。三木栄・阿知波五郎『人類医学年表』(一九八二)。磯野直秀『日本博物誌年表』(二〇〇二)。

これら年表が諸研究にはたしてきた価値は極めて大きいが、現代の要求に応えきれない部分もある。第一は分野の近い医薬・洋学・博物の年表が別々なため、相互の関連性が見えないこと。第二は主に人物や事項などを記述し、その出典たる古籍や文書などの史料名と所在が多くは不明瞭な点。第三は各年表に索引があるものの、現代の電子データ検索の利便性に到底およばないこと、等々。かつて私は中国(台湾)・日本・韓国・ベトナムの古医籍を実地調査し、約四千点について書誌データを蒐集した。すでに中韓越の全データは報告済みで、ウェブ公開もして容易に検索できる。他方、日本の現存古医籍は膨大で、悉皆調査など不可能。さいわい文科省の国文学研究資料館(国文研)が『国書総目録』と『古典籍総合目録』を統合し、新情報も追加して作成した「国書基本データベース」を二〇〇四年四月からウェブ公開した。

そこで国文研からデータベースの利用許可を得て、年代が分かる書を抽出した「日本の医薬・博物著述年表」を編纂、二〇〇六～一〇年にかけて茨城大学の紀要に連載した。国文研は二〇〇六年二月より、所在情報も追加した「日本古典籍総合目録」データベースをウェブ公開した。「同目録」は現在も増訂され続け、二〇一四年度から開始の歴史的典籍ネットワーク事業により、全国所在古籍のデジタル画像をウェブ公開し始めている。

これにしたがい私の旧「年表」も大規模に増訂し、二〇一五年一月やつと「同年表〔増訂版〕」をウェブ公開した。ウェブ上ならば全世界の誰もが利用可能、しかも全内容を一瞬で検索できるからである。ただし国文研の「同目録」は、基本的に各機関蔵書目録の記述を転載しているため、書誌情報に精粗の差があり、種々の誤認・不一致が混在している。あるいは「はしか絵」のごとく貴重な医史料でも、一枚刷りゆえ古籍とされず、「同目録」から除外されている例も少なくない。浮世草子や洒落本に分類されているが、「藪医竹斎」物のように医事を題材とした文芸書も多数ある。

よって私のウェブ「年表〔増訂版〕」では、個々の史料を調査・研究した先学の著書や論文を管見範囲で参照し、種々の補訂につとめてきた。これまで年代判断の可能な一九五三年までの一二八二

七件を年表化した。年代未詳の五九四一件も含めると、漢医薬一三二〇三件・蘭医薬約三〇〇〇件（推定）・博物等二五二八件となる。さらに医薬・博物古籍史料の総合プラットフォームを目指し、公開画像へのリンクと、その所蔵先を優先した所在追記を本年三月から開始した。現段階で追記は七〇%まで完成し、画像へのリンクは二七七九件におよぶ。その全貌を紹介するのは不可能だが、年表の作成で分かった日本の特徴を三点だけ述べてみたい。

第一の特徴は年表化の利点で、著述分野と数量の年代変化が一目瞭然になったことによる。文献は時とともに散佚するので、近い時代ほど現存率が高く、グラフ化すると右肩上がりになる。これは中韓越も同様だった。ただし日本の右肩上がりとは極端で、一九世紀になると加速度的に増加して幕末に至る。一九世紀から幕末までの六八八年間だけで六六五九件あり、八〇一八世紀の四六一四件以上だったのには驚くしかない。江戸中期・後期の人口は三千万前後で一定していたのに、なぜ江戸後期かくも大量に著述されたのだろうか。

一九世紀から急増したのは蘭学と本草博物の分野、および古方派の著述だった。蘭学と本草博物学は臨床目的より学問的性格が強く、本傾向は中韓越にみえない。この時期、多数の著述をなしたのは幕医・朝廷医のみならず、全国各地の藩医および京坂・江戸の高名な町医だった。彼らは多くの門人を育成したので、門人による大量の写本が現存したともいえる。背景には識字率の向上、貨幣商品経済の発達と参考文献の普及、豪農・町民・武士から医師・本草博物学者への転入、藩校の設立と医学教育などが寄与していただろう。

第二の特徴は初版の刊行率で、それが後世ほど増加する他国といささか異なる。成書年代の明らかな幕末までの医薬・博物書は現段階で一一三七件あり、うち初版本は二六九五件で平均の刊行率は二三・九%だった。年代別にみると、八〇一六世紀は四六〇四九八件で九・二%、一七世紀は三七四〇一一八四件で三一・六%、一八世紀は八七一〇二九三三件で二九・七%、幕末までの一九世紀は一四〇四〇六六五九件で二一・一%となる。出版の未発達な八〇一六世紀の書が後世の刊行を含めても低率なのは当然だが、以後は一七世紀をピークに減少していた。ただし初版の絶対数は倍々に増加していたので、それ以上に大量の写本が生産されていたことを示す。写本の生産は医薬・博物学に従事した人口に比例するだろうから、これが第一の特徴の有力な要因だった。

第三の特徴には現存古医籍の所在を挙げたい。自明だが、医史学者や大蔵書家のコレクションにより多数の古医籍が保存されてきた。京大・慶大の富士川游文庫、杏雨の乾々斎文庫（藤浪剛二）、国会の白井光太郎文庫と伊藤圭介文庫、内藤くすり博の大同薬室文庫（中野康章）、東大の鶚軒文庫（土肥慶蔵）、東北大の狩野亨吉文庫、順天大の山崎佐文庫、内閣の江戸医学館蔵書、研医会の中泉蔵書、東博の多紀家蔵書、日文研の宗田一文庫などである。かくも多種の古医籍コレクションは中韓越になかった。日本だけ科挙がなかったため、高収入だった医薬名家は養子縁組で「イエ」を存続させ、代々蓄積された医薬・博物書の一部は明治以降市中に出て医史学者らが収集、それらコレクションの多くが公的機関に収蔵されたからである。先達の学恩に感謝申し上げねばならない。